

1	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	15102001	推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発	渡辺 晃宏 ((独) 奈良文化財研究所・平城宮跡発掘調査部・史料調査室長)	A
<p>(意見等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究目的が明確であり、極めて有意義な共同研究である。 ・研究計画は、順調に進行中の様子が認められる。 ・研究成果の「木簡字典」は大変よく出来ており、既に多くの研究者から高い評価を得ている。 ・木簡解読支援データベースは、地名・人名だけでなく官職名・物品名などもできるとよい。 ・本来の研究課題である文字自動認識システムの開発は、かなり困難なことかと思われるが、可能な限り前進することを期待したい。 				
2	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	15102002	先史・古代社会の遠隔地交渉に関する人類史的総合研究	上村 俊雄 (鹿児島国際大学・国際文化学部・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>最初の2年間で基礎資料の収集や分析機器の設置を実現させ、本格的な研究展開への条件は概ね整ったといえよう。加えて、土器胎土の蛍光X線分析により土器の遠隔地移動の実態を追究するとともに、五島列島宇久松原遺跡の発掘調査では弥生時代前期・中期の埋葬施設を明らかにする等、研究課題に即した実績の積み上げがみとめられる。また、これら以外の研究組織各メンバーの研究もそれぞれに進展しつつあるように思われる。</p> <p>他方、発表論文内容からみると、実証的研究と理論研究を意欲的に結びつけようとする研究が主となっているが、一部に既存資料と他の研究者の学説を概ね踏襲した程度の研究も含まれ、質的な差がやや大きいように見受けられる。</p> <p>したがって今後の課題として、準備の整った実証的研究を大いに展開し発展させるとともに、メンバー個々の実証的研究が「遠隔地交渉の役割に関する高次の人類史的理論の構築」にどのように結びつくのか、その筋道を具体的に検討しつつ、チーム全体として「既研究にはなかった新たな視点を提示」できるよう、メンバー相互の研究内容をより有機的に結びつける努力が要請される。</p>				